



樺太史研究一面壁十年⁽¹⁾

松山 紘章（神奈川大学大学院歴史民俗資料科学研究科 博士後期課程）

1. 樺太史研究をはじめて

私が研究する「樺太」とは、北海道最北端の稚内市と向かい合うサハリン島である。現在はロシア連邦共和国サハリン州となっている。かつて、日露戦争後の1905年から1945年のアジア・太平洋戦争敗戦までの約40年間、島の北緯50度以南が日本領であった。

樺太の歴史研究をはじめて10年になる。「もう」10年が経ったのか。それとも、「まだ」10年しか経っていないのか……。正直、研究をはじめた博士前期課程にいた約10年前に、10年後も（仕事をしながら）研究が中断した時期もあったが、博士後期課程に進み研究を継続しているとは思わなかった。

日本植民地下の樺太史研究がソ連崩壊後に本格的となり、現在も研究の蓄積が進んでいる段階である。今後も明らかになることが多くなると考えている。また、歴史民俗資料科学研究科で出会った諸先生や仲間、樺太史研究に協力をしていただいた方々に恵まれたのも研究を続けていきたいとの決心の柱になっている。

研究に個人的心情を挟むのは厳禁であるが、母方の祖父母が樺太の出身者で研究をはじめる前に亡くなっている。本人から沢山の当時の話を聞くべきであったとの後悔も背中を押していた。

2. 迷走した研究テーマと資料収集

修士論文では、漠然と資料収集を進めて樺太の何をテーマにするのか迷っていた。その時に先行研究を調べて決めたのが街と社会の形成であった。様々な資料を調べ

る中で『樺太日日新聞』（以下『樺日』）の閲読にたどりついた⁽²⁾。

また、何を重点に置き調査するのかを考えた末に、樺太庁が置かれた豊原も研究が少なく、樺太南部にあり玄関口として多くの人やモノが行き交った大泊町を対象にした。自宅近くで『樺日』の閲読ができるのは国立国会図書館であり、2011年7月から『樺日』閲読のため国会図書館に通う日々がはじまった。最初は、週1回……ではなく月2から3回程度であった。しかし、修士論文の執筆に入る2012年春頃からは、ほぼ1日置きに通った。大泊の政治、産業、祭事、社会、人口、漁業など多方面の記事を拾い集めるという気が遠くなりそうな作業で、それはまさしく修行に近かった。記事の閲読だけではなく、マイクロフィルム化された紙面を国会図書館でプリントアウトしてもらい、帰宅後はパソコンに記事を入力する作業をした。また、新聞だけでは論拠に乏しかったため、他にも当時の出版物や絵葉書、地図などを調べに樺太と結び付きの深い札幌・小樽・函館の図書館や北海道立文書館及び北海道立図書館等で調査を行い、引揚者団体の一般社団法人全国樺太連盟北海道事務所に出掛け、情報収集をした。

修士論文は1928年に大泊の一大事業であった、大泊築港の完成までを区切りに研究を進めて仕上げた。国会図書館に所蔵する1910年から1928年までおよそ18年分の『樺日』を調べた。

現在の博士後期課程でも、進んでは立ち止まりの日々である。これまでに加えて日本植民地期の樺太を広く捉



樺太庁『樺太の近況』、1929年頃？（筆者所蔵）写真は大泊港付近の全景

える意味で結び付きのあった北陸や東北での資料収集、樺太出身者への聞き書きなど視点を变えて取り組んでいる。また、今後は当時を感じるためにもサハリンへ行くことも考えている。

3. ある旅での出来事

ここからは、話を変えてちょっとした旅の体験談。2019年9月に新潟県の佐渡島へ出掛けた。直江津港9時30分発の佐渡汽船高速カーフェリーあかねに乗船して小木へ向かった。

佐渡を訪れる目的は、宿根木の佐渡国小木民俗博物館での千石船「白山丸」の見学、もうひとつは新潟と樺太の関係をテーマに研究しようと考え、その一環で羽茂のマルダイ味噌資料館に行き、樺太での販売にゆかりのある展示資料を見ることであった。

島内はバスで移動した。バス時刻の都合で佐渡国小木民俗博物館、マルダイ味噌資料館の順で巡った。最初に佐渡国小木民俗博物館・千石船「白山丸」展示館を見学した。授業で和船の歴史や構造を学んだこともあり、実寸大の和船を間近で見ると圧巻であった。また、佐渡国小木民俗博物館も見学した。説明文がほとんど見当たらないが、生活用具や漁具など民俗資料のいずれからも当時の殷賑が十分に伝わる。

その後、次の目的地のマルダイ味噌資料館へ向かう。一度、小木港に戻り昼食を済ませて、新潟交通佐渡の羽茂高校行きのバスに乗り込み、海岸線を沿うように15分ほど進んだ。乗客は私一人。大橋というバス停を降りるとマルダイ味噌資料館がある。

資料館への話に入る前に、佐渡の味噌やマルダイ味噌の歴史を簡単に紐解いてみたい。佐渡における味噌のはじまりは江戸時代末期から明治時代初期に北海道へ佐渡から多くの人々が出稼ぎや移住した。北海道へ行くにあたり、佐渡の味噌を取り寄せるようになり需要が増加した⁽³⁾。また、北前船の寄港地が小木港でもあり、安価に北海道へ味噌が運べた⁽⁴⁾。さらに、樺太へ販路が広がりをみせた⁽⁵⁾。

小木港に近い羽茂（旧羽茂町、現在の佐渡市）も明治時代以降、北海道開拓が進むとともに味噌醸造業が増えた⁽⁶⁾。その中で、株式会社マルダイの前身である羽茂味噌合資会社（以下羽茂味噌）も創立した⁽⁷⁾。羽茂町史に創立経緯の記述がある⁽⁸⁾。

孫右衛門（注・板山孫右衛門）は更にもっと大きな工場を建て、味噌醸造を行おうと村内の資産家に呼びかけ出資を募り、明治三十一年（一八九八）四月、株式会社マルダイの前身である羽茂味噌合資会社を創立した。北海道への移出を目ざして、池田海岸の現在マルダイ味噌がある場所に、最初二七坪の工場を建てて操業を始めたといわれる。（284頁）



絵葉書：稼働中の羽茂味噌合資会社（筆者所蔵）

羽茂味噌は佐渡の味噌業の興隆とともに成立した。佐渡の味噌と樺太の関係があることが株式会社マルダイの社史『マルダイ味噌百壱年史』から分かる。

殊に大陸経営に着目し、豊富低廉な満州大豆調達の先鞭と、樽用資材である竹材並びに松材の確保に遥に九州・樺太からの資材導入を図り原価低減・競争価格導入等今日的な企業経営体質の基礎を確立するにいたる。（13-14頁）

樺太との関係は樽用の松材の移入がはじまりであった。羽茂町史には工場に隣接する大石港で「大正の終わりから昭和一五年頃までは、樺太（サハリン）から味噌樽の蓋材の木材を運んだ「真岡丸」など、帰りには北海道や樺太行きの味噌を積み込んだ」（344頁）とある⁽⁹⁾。羽茂味噌は1919年に樺太へ販売する直送体制を確立していた。

樺太市場物流の直送体制を確立す。創立以来小樽・三忠合名会社を代理店として販売した樺太に商品を直送体制でもってした（中略）ここに樺太は直送ルートが確立した新大陸として大泊真岡に特約店開設にいたり、東西両海岸の主要地にはいたるところマルダイの看板がうかがえるにいたる。佐渡と北海道、佐渡と樺太はともに海でつながる隣接地の感覚で営業に取り組む、それ進取の気象と言わずいかがしよう。（19-20頁）

樺太での販売実情が上記の社史から伝わる⁽¹⁰⁾。1919年には、羽茂味噌は樺太の家庭で使われていたとうかがえる。また、創立30年を迎えた1929年に佐渡へ樺太の味噌販売をする特約店が招かれていた。

創立三十周年記念式典挙行する。同式典にあたっては、北海道・樺太の特約店一行を佐渡島へ招待し、その島内移動にあたって佐渡中の全車両九台をチャーターして、その後の佐渡島団体観光の先鞭をつけ



写真：現在の羽茂味噌合資会社（株式会社マルダイ味噌）工場跡（筆者撮影：2019年9月）

るものと評されるが如きであった。(27 頁)

1936 年には、樺太の中心地である豊原で行われた共進会に佐渡味噌の優位性を宣伝している⁽¹¹⁾。つまり、羽茂味噌を通じて佐渡と樺太の関係があつてのことだろう。

では話を戻して。バス停を降りて目の前の交差点の案内板を見るとひとつ消されている看板があつた。近づくとマルダイ味噌資料館である。「まさか……」との思いで歩くと看板沿いの工場のような建物は閉鎖されている。そして、数分歩くと味噌樽と「ようこそ味噌資料館へ」と書かれた車止めが置かれた場所に着いた。味噌樽の形をした入り口に近寄るとシャッターは下がり「臨時休業」の張り紙があつた。敷地内の草は雑草と化し、建物に生気がない。臨時休業ではなく閉館しているのが分かった。あまりのことにその場で少し呆然とした。

帰りのバスは約 2 時間後。徒歩が早いと考え、晴天で残暑厳しい海岸沿いの道のりを 40 分ほど歩いた。ほとんど人と会うことも車とすれ違うこともない、これまた若干修行にも似た思いもよらない散歩になった。

小木港へ戻り観光案内所でマルダイ味噌資料館について聞いてみたところ「何年か前に閉館しました」と言われた。また、別の観光案内所でも同じ質問をすると結果は一緒だった。正確な閉館時期は判明しなかったが、最近ではないようだ。

新潟と樺太の関係を調べ出した当初、マルダイ味噌資料館にインターネットで見つけたホームページを頼りに資料の有無を手紙で尋ねた。マルダイ味噌の関係者から数年前の計画倒産時に資料のほとんどは処分したとの趣旨の丁寧な御返事をいただいた。この時点で、手紙の返事が届いたということは、資料館は閉館していると思い込んでいた。また、改めてお礼の電話をした時も、閉館していると思い込み資料館に関する話をしなかった。今回行く前にホームページにある電話番号へ確認すべき

であつた。

集めた情報はもう少し踏み込んで手間暇かけて確認する作業が必要であつた。形あるものは消えてなくなることがある。頭では理解していたが、資料収集には「機転」と「足」を使うことも大切だと改めて学んだ。

4. 今後の研究について

研究をはじめた時期が遅いこともあり、樺太出身者と出会える機会が減っている。また、今回の佐渡行からも樺太を知る手掛かりが何かの拍子で失われることもあると思った。今後も関係者に会い話を聞くこと、公文書などに限らず様々な関連する資料、非文字の資料収集等を幅広く精力的にしていきたい。これからも地道に樺太史研究を続けていくつもりだ。

【注】

- (1) 本来は「面壁九年」である。達磨大師が中国の少林寺で 9 年もの長い間無言のまま壁に向かって座禅をして悟りを開いたことのお話に由来。転じてひとつの目的のため、長い歳月をかけ専念して、努力してやりとげることのたとえ。
- (2) 『樺太日日新聞』は 1908 年 8 月に発行がはじまる。
- (3) 中川七三郎「佐渡味噌の沿革」『醸協』第 82 巻第 10 号 1987 年、681 頁。
- (4) 注 (3) 中川、前掲論文、681 頁。
- (5) 小田島庄司編『産業調査報告書』新潟商業学校産業調査部、1935 年。国立国会図書館デジタルコレクション、アクセス日付 2018 年 5 月 1 日。
- (6) 羽茂町史編さん委員会編『通史編 近現代の羽茂 羽茂町誌第四巻』羽茂町、1998 年、282 頁 -283 頁。
- (7) マルダイ味噌は、1967 年度に羽茂味噌合資会社からマルダイ味噌合資会社に改称している。1984 年 3 月に株式会社化する（株式会社マルダイ編『マルダイ味噌百周年史』〔非売品〕1999 年、47 頁、113 頁）。
- (8) 注 (6) 前掲書、284 頁。
- (9) 注 (6) 前掲書、344 頁。
- (10) 注 (7) 前掲書、19-20 頁。
- (11) 注 (7) 前掲書、34 頁。